

思春期の児童・生徒指導

わずかひと月余りの夏休み中に様々な生活体験を挟んで、思春期の児童・生徒の心と身体は大きく成長しています。人間関係に変化が見られたり、ものの見方や考え方も今までよりも大人びてきたりすることもあります。特に難しい年頃と言われる思春期の指導においては「1.日常から心に寄り添った指導につとめる」「2.思春期の特性を理解する」といった『子ども理解』のポイントを押さえ、教師と児童・生徒の間によりよい「信頼関係」を積み重ねていくことが重要です。

高学年の女子は難しい…

転勤した学校で初めて6年生を担任することになったY先生。期待と不安が入り交じる中、1学期は緊張の毎日でしたが、素直で明るい子どもたちに囲まれ、何とか順調に学級づくりを進めていました。

ある日、掃除の見回りをしていたY先生は、理科室でおしゃべりをしている女子3人組を見つけました。Y先生は当然「ちゃんと掃除しなさい。」と注意しました。おしゃべりはよくあることだったので、特に厳しく言ったつもりはなく、短く一言注意しただけでした。

しかし、次の日からクラスの一部の女子の態度が急変しました。掃除中に注意された女子3人組と仲良しの何人かがY先生と話さなくなったのです。それからというもの、Y先生が話しかけても「はい」「いいえ」「べつに」…と、素っ気ない返事しか返ってこなくなりました。初めて高学年を担任したY先生は、女子の集団での圧力に圧倒され、個別に対応することができなくなってしまいました。先生VS女子グループのようになってしまったのです。

反発する女子グループに対応する自信が無くなってしまったY先生は、学級で起こった問題について、いつものように全員の前で思いを語りました。しかし、女子グループにとって、それはお説教であり、全員の前で自分たちが恥をかかされているとしか思えなかったのです…。



あ のとき、子どもとよりよい信頼関係を築くためにはどうすればよかったのだろう

1

日常から心に寄り添った指導につとめる

おや？表情が暗いのが気になるなあ

あれ？いつもの友達と一緒にじゃないぞ

悩んでそうだな…話を聞いてみよう

普段からアンテナを高くして、気になることがあれば「なぜそのような行動をしているのか」共感的に理解し、一人一人の行動傾向や性格・特徴に合わせて、コミュニケーションを図りましょう

思春期の特性をつかんで心に寄り添う指導の一例

感情的に叱ったり、みんなの前で恥をかかせるような場面をつくってしまったりで、その後の子どもとの関係づくりに支障をきたすことがあります。個別に、子ども自身が良くない状況を振り返り語るができる場をつくるよう心がけています。

「教師と個人」がつながる

個々の生徒の心身の状況や人間関係を把握し、互いに理解し合うため、個人ノートを活用しています。必ず返事を書いて返すことや、声かけや個別相談など、その後のステップにつなげることが、よりよい関係づくりにつながります。

「教師と集団」がつながる

気になる女子グループのおしゃべりにはさりげなく混じるようにしています。とはいってもひたすら聞き役に回って…彼女達が私の貴重な情報源でもあります。

「個人と個人」をつなぐ、「集団と集団」をつなぐ、といった教師の働きかけも大切です。

2

思春期の特性を理解する

「もっとわかってほしい」

「自分はどう思われているのだろう」

自我の目覚め

反発

矛盾する心が同時に存在

不安

「もっと周りの人から認められたい」

「恥ずかしい」「失敗したくない」

